

平成 29 年度第 2 回南北海道定住自立圏共生ビジョン懇談会議事録（要旨）

日時：2017 年 10 月 4 日（水） 13:30～14:30

場所：函館北洋ビル 8 階ホール

（13:30 開会）

<挨拶>

（函館市国際・地域交流課長）本日は委員およびオブザーバーの皆様方には、ご多忙にもかかわらず本懇談会へご出席いただき厚くお礼申し上げます。

先日の新聞報道にもあったように、北海道新幹線の開業から 1 年半が経過し、この半年間の利用者数は前年同期 23% 減であった。一方で、在来線時代の 2015 年と比較すると 36% 増で推移しており、新幹線効果は開業 2 年目も保たれている。この効果を圏域全体に行き渡らせることが、この定住自立圏の役割の一つだと考える。

当圏域の人口については、東京への一極集中という国全体の状況があり、人口減少に歯止めがかかっていない状況ではあるが、当圏域の定住自立圏の取り組みは、平成 26 年度にスタートし、まだ緒についたばかり。その成果が現れるには、長期的な視点が必要だと考えている。

来年度は次の 5 年間のビジョンを定める、第二次共生ビジョンの策定を予定している。この道南が、将来にわたり「安心して住み続けられる地域」となるよう、連携市町の皆様と一致団結して取り組んでいければと考えている。

結びに、皆様におかれましては忌憚ない活発な議論をお願い申し上げまして、私からのご挨拶とさせていただきます。

<議 事>

（南部座長）議題に入る前に、ビジョン懇談会に初めてご出席いただく小笠原委員から、自己紹介を兼ねて、地域の課題・現状などをお伺いしたい。

（小笠原委員）江差観光コンベンション協会の小笠原です。前回急遽、会場に向かっていく途中で急用が入ってしまい参加が叶わなかった。皆様にはご迷惑をおかけした。私からはまず、江差の観光について説明させていただく。江差の場合は 1 月 2 月という期間に“たば風の祭典”を開催している。これは、冬の寒い時期になんとかお客さんをお呼び込もうということで、寒いということを取り上げ、あえてそれを一つのキャッチフレーズとして作ったのが始まり。祭典では、なべまつりというものを実施。その他江差町では 5 月には、いにしえ祭り、7 月には島祭り。今年いかの不漁により中止になりましたが、島祭りに合わせて、いかさし祭りも例年開催。8 月には姥神大神宮祭。それから 9 月には追分大会。

これらのうち観光協会が担当させていただいているのは、島祭りといかさし祭り。姥神大神宮祭では観光協会が直接ではなく、観光協会が実行委員会事務局として担っている。

昨年は新幹線の開業ということで、江差にも多くの観光客が入ってきた。今年は若干減ったとはいえども、まだ例年より多い入り込みを記録しているという状況。最近は特に地方から来るお客様に関しては、団体よりは夫婦で、もしくは小さな団体で来られるということが多い。

それから、20年近く経つが江差町、上ノ国町そして松前町で三町歴史クラブということで連携して誘致宣伝を実施。また、定期的に情報交換を行うことによって、お互いイベント内容や時期がかけ合わないよう工夫している。簡単ではあるが、観光という面から見た江差町の紹介ということで、お伝えさせていただいた。

(南部座長) ここからは議題に沿って進めさせていただく。

【議題1】 事務局より資料に基づき説明

(意見・質問等 なし)

【議題2】 事務局より資料に基づき説明

(南部座長) 今回は大きな事業変更等ではなく、事業費やKPIの数値を更新するというものが大半であるため、委員から意見をするというのは少し難しいように感じられる。その中でも例えば18ページのように新幹線が開業した直後の年ではなく、一年経ってその後ということで新幹線開業から少しずつ事業の内容を広げて活性化していくというのが、強いて言えば大きな変更になっていると言えるかもしれない。

意見等無いようですので、この変更案を今年度の南北海道定住自立圏共生ビジョンの成案として確定したいと思うが、いかがか。

(意見・質問等 なし)

【議題3】 事務局より資料に基づき説明

(意見・質問等 なし)

【その他】

(南部座長) 皆様には今年度、本日を合わせて2回のビジョン懇談会で、それぞれの専門の立場で地域の代表として共生ビジョンに反映させるご意見、アイデアをいただいていた。せっかくの機会であるため、皆様から一言ずつご意見等を最後にいただきたい。来年度は二次ビジョン策定のための素案を作っていくことになるため、定住自立圏としては大事な一年になる。前回も申し上げたが、種を蒔くという意味でも、様々なご意見をいただ

きたい。

(阪井副座長) 前回の自己紹介と重複する部分もあるが、私はもともと自治体職員で、4月から観光協会に派遣されて今の仕事に従事しているという状況で、9月で約半年が経った。今まで行政でやっていた観光の仕事と今の観光協会の仕事はというと、実際には観光協会自体は民間ではありませんが、そうはいつても民間であって民間でないような感じの中で仕事をしている。主に現在はイベントを担当しており、前回の会議後であれば7~9月と本当にイベント漬けの3ヶ月を過ごし、そこで感じたのは自分たちがやっているイベント事業が、本当にそれでいいのかということ。それを自分たちで確かめるということがなかなか難しい部分がある。前回もお伝えしたことだが、南北海道観光推進協議会が解散となってしまう、全体を繋ぐ会議がなくなったことによって、情報交換の場がなくなってしまった。それぞれ繋がりが強いところでは広域連携をやっているが、地域全体の意見というものをざっくばらんに話す機会が現在の南北海道の地域では観光に関してはあまりない。そういう取組みを今後できれば、冒頭に中村課長のご挨拶でもあったように、新幹線乗客が2割減っているということも懸念されるどころ、今後の道南地域における観光分野の情報交換の場を作っていくということも、大切な事業ではないかと考える。

(小笠原委員) 我々観光協会といたしましては、昨年東京に、五所川原たちねふたの館長が行かれるということで、私と観光協会副会長、それから江差の施設の館長と3人で同行させていただいたが、五所川原の方は東京のエージェント関係でコネクションが広く、それに頼る形で一緒に色々と回らせていただいた。非常に良い誘致宣伝ができたと感じている。さきほど話にもあったとおり、南北海道観光推進協議会が解散となった。情報交換の場があれば、どこかに誘致に向向くということがあっても飛び込みではなく、もしかするとどなたかにご紹介いただいたうえで訪問することが可能となるかもしれない。その東京訪問の際に構築したつながりによって今年は、エージェントの方々に江差までお越しいただいた。そしてその際の打合せに係る反省会を12日に予定しているというところである。それから、前回の話の中で医学部誘致等という話が多く出ていた。出来れば函館に誘致等いただければと思う。江差にも道立病院があるが、医師がなかなか集まらない。患者についても、どちらかというとなら函館に出て診察を受けるというのが多い。医学部等の力を借りながら、函館市から広域的に医師の派遣ができるなどという体制がとれば、非常に良いと考える。

(小林委員) 私は観光というテーマから、ビジョンに対する意見等いただきたいということで、委員に就任した。函館市からこの道南の各市町に入ってくる為の二次交通の整備を早急に行っていかなければ交流人口の拡大に繋げることは難しく、また、札幌延伸となってしまうと、ただ通過されるという地域になってしまう。そのため、これからも継続的にこのことについては協議いただくとともに、定住自立圏の中でも事業として取り上げて対応

いただきたい。

次に、ビジョンの12ページでは圏域での平均宿泊日数が増加しているということでグラフがあり、その前段の説明文として、消費単価を上げるための滞在型観光・広域観光に注力する必要があるとの記載があり、その次の外国人宿泊客数の推移についての説明文では、外国人観光客の満足度を向上させるための体制整備を進めていく必要があると書かれている。これらについて、“注力する必要がある”だとか“進めていく必要がある”などという文言では、具体的ではなくはっきりとビジョンが見えてこないというのが正直なところ。関係市町は“全市町”となっているが、各機関での役割なども、もう少し明確にしていくことも必要なのではないか。例えば我々のように民間にいる商工会や観光協会、その役割をもう少し明確にできればいいのではないかと考える。そのあたり、もう少し整理していただければそれぞれの役割も明確になり、大変ありがたい。

(岩島委員) 南部座長がおっしゃっているように、次年度に続く種蒔きをしていければと考えて参加している。十数年前に家族と母とで父を介護して看取って、今は母も高齢であり家族で介護などしている。資料11ページにあるとおり、圏域内では10万人あたりの医師数が214.5人であるとのこと。その中でも、函館の入っている南渡島が多く、北渡島檜山エリアや南檜山エリアは遙かに少ない。全道平均に迫れるよう、医学部を函館に誘致することを継続的にお願いしたい。難しい事情もあるだろうが、あきらめずに何度もチャレンジしていただきたい。

(中居委員) 道の駅の店長を拝命してからちょうど1年半が経った。昨年度も感じていたことだが、11月～3月という冬期間はなかなかお客様の動きが鈍い。雪による移動の難しさ等、北海道の冬事情と言ってしまうとそれまでなのだが、それを逆手にとって、北海道の冬をメインテーマに据えたイベントを考えたいと思っている。冬だから仕方ないではなく、そのようなイベントを積極的に打ち込み、人的交流を増やしていきたい。

(金谷委員) 福島町の金谷です。私が担当しているものでは、イベントが5つくらいあり、近々では今月の29日に予定しているものもあるが、今年最後のイベントということもあって、若干のイベント疲れというところがある。福島町全体で見るとかなりの量のイベントがあるため、それらのある程度整理する時期に来ている。昨年からは福島町では新そばまつりを始めて、今年は2回目。昨年は松前町のイベントと日程がぶつかってしまい、失敗したと思ったのだが、それが逆に相乗効果を生んで誘客促進が図られる結果となった。来年以降については、マグロ祭りとの連携しながら進めていく予定である。当圏域内全市町のイベント内容や日程を把握することは非常に困難であるし、そうであれば道南全域のまとめ役となるような協議会、そのようなところで情報交換をする必要があるのではないか。そうすればイベント日程の調整等についてもスムーズに運ぶと考える。

福島町は過疎の町で、医療の過疎でもある。診療所が二つあったのが一つなくなってしまい、何かあれば唯一の診療所もしくは函館市まで診察を受けに行くという状況である。医学部の新設については福島町としてもそうだが、道南全域としても強い要望があることから、そのような誘致等については、粘り強く活動していただきたい。

(渡部委員) 先程事務局からもお話があったとおり、昨年の新幹線の開業に伴いまして、多くの観光客にお越しいただいた。今年につきましては、かなりそれが落ち着き、人数もかなり落ちてきている。それに比例して、貸切バスの現状におきましても前年とは比較にならないぐらいの落ち込みになっている。来年度はそれをどうしようかと議論しているところである。函館・道南においては、まだまだ観光資源があるため、そういった観光資源をアピールする場を多く作り、PRしていくのが大切ではないか。

また、資料の中にも記載されているとおり、ICカードを函館バスと市電が導入しているが、資料の15%よりも普及しており、18%程度まで上昇しているところである。来年度においては、定期券がICカードになるということと、高齢者の福祉カードにおいてもICカードになるということで、まだまだ導入が広がり、コンビニやスーパーなどでも多くご利用される機会が増えるだろうと考えられ、いよいよ函館もIC時代に突入というのが期待できると考えている。

(吉崎委員) 私は医療の立場から話させていただく。医学部の誘致の件では、資料の11ページにあるとおり、人口10万人に対しての医師の数が函館は全国平均を上回って多いように見えるが、市内でも医師不足は顕著であり、どの病院においても医師を確保するというのは非常に困難なことである。実際どの病院も、なかなか思うように医師を確保できていないというのが実状。全道平均というのは過疎地域も含めてあくまでも平均であって、札幌や大きな都市と比べると函館の医師数は少ないと考えられる。道南圏域全体で病院が少ない、医師が少ないということで函館に医療が集中するということもあることから、函館の人口に対しての医師の数だけではなく、道南圏域に対する医師の数ということで考えていかなければならない。そういう意味では、地元で医学部や大学病院があると医師の確保が容易になると考えられるが、様々な理由によって断念せざるを得なかったということがこれまであった。また、日本医師会では医学部の設置について反対の意見が出ている。というのは、医師は現在の医学部数で十分充足されると考えているため。医学部定員を増員したり、あるいは現状のままで据え置くとしても、人口減少の影響等もあって医師は十分に確保できるという考え方とのこと。医師は都会では充足されているのだろうが、偏在しており、地方にはあまり来てもらえないという現状がある。当然医学部の設置が理想的だが、それが不可能ということであれば医師をどのように大都市から地方に誘致できるか、確保できるか、医師が偏在している現状を変えるためにも、制度としてしっかりと作るべき。

また、一つ気になったことで、前回のビジョン懇談会の意見もこのように一枚物にまとめていただいているが、こういった意見はどこで検討されて採用されるのか。

(中村国際・地域交流課長) 頂いたご意見は基本的には来年度のビジョン変更内容として検討するが、実際出来るか出来ないかということもあるため、本日オブザーバーとしてお越しいただいている各市町の課長様方を中心に、各自治体と相談したうえで、実現性の高いものについては来年度のビジョン変更案に反映していくということ。ただ、共生ビジョンというものは協定に基づいたものであるため、ビジョン懇談会で挙げた意見を全て反映できるということではなく、一定程度の制約はある。

次年度からは、二次ビジョン実施計画策定作業を始めるため、現在の協定内容では反映できない意見であっても、協定変更をして取り扱うことのできる事業範囲を広げ、必要があれば、新ビジョンに反映させることは可能であるとする。

(吉崎委員) このスケジュール上でいくと、平成29年度においては、1月から2月にかけての担当課長会議で検討されるということか。

(中村国際・地域交流課長) 本日いただいたご意見については、基本的には2月の課長会議で実務的に、実現可能かどうかを検討したうえで、年度が開けた5月の担当課長会議にて変更案を策定する。そして、少し重複するが、次期ビジョンについては平成31年度からスタートということであるため、5月の課長会議で検討して、その翌月に予定されているビジョン懇談会で提案するという流れになる。

(南部座長) さきほどまで、ここで提案したい内容をいくつか浮かべていたが、皆様と同様の意見がいくつもあったため、最後に少しだけ意見させていただく。一つは二次ビジョンに関わることであるが、協定変更を伴うような大きな話であれば、特に福祉に関する議論が必要ではないか。現在の協定の中には福祉という柱が立っていないため、もっと安心して暮らせる地域のことや、高齢化のことを考えると、やはり福祉を柱にしていくという方向が検討できるといいのではないか。もう一つはいろんな分野でもそう感じたことではあるが、情報共有をどうするかということ。実はこの懇談会自体もなかなか普段からお目にかかる方ばかりではない中で、突然集められるといった部分があるなか、活発に議論できるようにと、あえて座席の配置を狭くしていただいたというところだが、実際のところ、折角来ていただいてもアイディアを出すとか議論するとか事業に繋がる話を活発にするのはなかなか難しいと考える。そのため、これはどういう形でビジョンに入れるか難しいところではあるが、今後検討したいのは、情報共有や連携のあり方そのものを、例えばシステムや場を作るといって、そういった形で具体的に検討していけるといいのではないか。私は座長として、この場では皆さんに少しでも活発な議論をしていただけるように進

行はしていくが、もう少し良い方法はないかとも考えている。その分野の専門家ではないが、例えばワークショップ形式を採用してみたり、若者が懇談会に参加するなどもありえるのではないか。二次ビジョンは再来年から運用されるものであるが、そういう連携のあり方そのものが新しくなっていくことも希望する。

それから、医学部の誘致については、確かにいろんな意見があると思うが、全体としての目標としては、とにかく医師の人数を増やすということで、例えば未来大は情報技術で、観光分野の方々は函館全体の魅力で、一つのタスクに向けて様々なアプローチが可能である。医学部を誘致するという事は、医師を増やす一つの方法ではあるが、その実現が難しいということであれば、様々なアプローチで、とにかく人を増やすということをやりに続けていくしかないのではないかと考える。

<その他>

(事務局)

共生ビジョンの変更について

- ・本日いただいたご意見等を踏まえて変更したものを、総務省や北海道に送付するとともに、委員の皆様にも送付させていただく。また、ホームページでも公開する。

(南部座長) 本日の議題が全て終了した。本日はこれで閉会とする。

(14:30 閉会)

出席委員 9名

欠席委員 3名

傍聴者 無